

授業リポートを読んで

信州大学教授

藤森裕治

「きいて、きいて、きいてみよう」という単元名には三つの「きく」が入っています。一つ目はきき手側の「きく」、質問です。二つ目は話し手の「きく」、これは質問に耳を傾けることです。そして三つ目は記録者の「きく」、インタビュウの様子を観察しながら、そのやりとりを整理したり評価したり、ときに軌道修正を促したりして、インタビュウの内容をまとめることです。これら三つの「きく」は、生涯にわたって生きて働くことばの力としてたいへん重要なものです。

青山先生の授業では、子どもたちが自力でインタビュウの練習を行い、その出来映えを自分たちで振り返るところから学びが始まります。子どもたちは実際に体験してみても、自分には何ができているか、何が課題かを実感しています。

続いて、デジタル教科書のモデル動画を使って、きき手・話し手・記録者が気をつけるべきポイントを押さえています。子どもたちは初めに解説なしの動画を視聴し、練習で感じた課題を自分のことばにしています。その際、青山実践のすばらしいところ

は、記録者に重点が置かれている点です。記録者は、インタビュウの様子をただメモするだけでなく、第三者としてインタビュウを観察しながら、適切な介入をする存在です。記録者がモニター役を上手に務めることで、よりよいインタビュウが生まれるのです。

こうした「下ごしらえ」を経て、本番のインタビュウが行われます。うまいインタビュウができたかどうか重要ではありません。例えばDグループでは、「あなたにとってダンスとは？」という曖昧な質問が出され、話し手が返答に詰まっています。このとき、記録者が「質問を変えたほうがいい」とささやき、きき手は「ダンスは自分の生活につながると思いますか？」という質問に言い換えられています。このような経験を重ねながら、よりよいインタビュウをするにはどういう点に留意する必要がありますか、最も大切な学びとなります。

最後にインタビュウの報告が全員の前で行われています。このとき、記録者の報告、きき手の印象、話し手の自己認識との

間には、しばしばずれが生じます。これが話しことばによる情報のやりとりの特徴です。無理にすり合わせる必要はありません。インタビュウを通して子どもたちが知るべき最も大切な情報は、相手のプロフィールではないからです。きき手や記録者を務めた自分は、相手をどのような目で見る傾向があるのか、それを知ることがこの学びに埋め込まれた最も大切なポイントなのです。例えばEグループの記録者は、相手の声の調子から印象を得る傾向があるようです。そのことに気づくよう、さりげなく促している青山先生のコメントに、私たち教師が学ぶ点は少なくありません。



1960年長野県生まれ。信州大学教育学部教授。専門は国語科教育学(授業研究)、日本民俗学。著書に『授業づくりの知恵60』(明治図書出版)、『すぐれた論理は美しい』(東洋館出版社)など。光村図書小学校・中学校「国語」教科書編集委員。